



主催 日本教育文化研究所



令和8年度 教文研教育シンポジウム

一人一人を大切にする学校へ
～ 信頼関係を築く力 ～

令和8年12月5日(土)9:20～11:55



パネリスト
元学校法人湘南学園
学園長

住田 昌治 氏



パネリスト
日本大学文理学部
教授

土屋 弥生 氏



パネリスト
法政大学文学部心理学科
教授

渡辺 弥生 氏



コーディネーター
日本教育文化研究所所長
千葉大学名誉教授

明石 要一 氏

下記URL及びQRコードよりお申し込みいただけます

<https://form.dr-seminar.jp/seminars/nvrhbj/261205>

配信方法：Web配信（全国どこでも参加可能）

参加方法：事前申込制

連絡先：kyoubun@ntfj.net 03-3262-1859



パネリスト 住田 昌治 氏 プロフィール

1980年度より横浜市立小学校勤務。2010年度～2017年度横浜市立永田台小学校校長。2018年度～2021年度横浜市立日枝小学校校長。2022年度～2025年度学校法人湘南学園学園長を歴任。話し合いツール「円たくん」の開発者。現在は、教職員や児童生徒が自走するための学校組織マネジメント・リーダーシップ、働き方、ごきげん革命等の研修や教育講演、新聞や雑誌の連載や記事執筆を行う。

日本持続発展教育（ESD）推進フォーラム理事、神奈川県ユネスコスクールネットワーク会長、埼玉県所沢市教育センター事業推進委員、日本国際理解教育学会会員、「みらい塾」塾長等を歴任。

著書に『カラフルな学校づくり』（2019 学文社）『任せるマネジメント』（2020 学陽書房）『指示ゼロ学校づくり』（2022 明治図書）『ミドルリーダーの育て方』（2022学陽書房）『校長先生、幸せですか？』（2023教育開発研究所）『ごきげん革命』（2025教育開発研究所）等がある。

一人一人を大切にする学校づくりは、制度の改善だけでなく、人と人が関係を育てる力を学校文化として根づかせることで実現します。子どもが存在そのものを尊重されるとき、教師は「指導者」にとどまらず成長の「支援者」として寄り添う姿勢が求められます。

その姿勢を支える基盤が、学校組織のウェルビーイング指標としての「ごきげん」です。「ごきげん」とは個人の感情にとどまらず、情緒的安全性や対人信頼、協働のしやすさが保たれている状態、つまり組織が健全に機能しているかを示す“場の体温”です。

大人が穏やかで開かれた状態で接することで場が安定し、子どもは「ここは安全だ」と感じて学習意欲や自己表現の基盤を築きます。逆に緊張が高まると自己防衛的になり、学びや対話の質は低下します。

この「ごきげん」という土壌の上に、①尊重の原則 ②対話の原則 ③協働の原則 を学校全体で共有・実践します。成熟した大人が関係を整え続ける学校は、子どもが「ここにいていい」と感じられる確かな居場所となり、未来を共創する力を育んでいきます。

パネリスト 土屋 弥生 氏 プロフィール

日本大学文理学部教授

茨城県水戸市生まれ。

東京学芸大学教育学部初等教育教員養成課程社会選修卒業。

東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程（社会科教育専攻）修了。学校心理士スーパーバイザー。

管理職を含む24年間、高等学校の教諭（地歴公民科）として教育活動に従事。教員キャリアの後半は「エンカレッジコース」で不登校経験をもつ生徒、発達に課題をもつ生徒等多様な生徒の指導に関わる。その後、日本大学に移り現職。

専門は「臨床教育学、現象学的教育学」で、児童生徒理解、教師の実践知、多様な児童生徒への具体的対応等について研究を進めている。著書『教師と保護者のための子ども理解の現象学』（2023 八千代出版）ほか。

作家の村上春樹氏の小説『スプートニクの恋人』に、「理解というものは、つねに誤解の総体に過ぎない」という一節がある。私たちは他者に対して、気づかぬうちに作り上げてしまった「誤解」を「理解」であると思こんでいる可能性がある。しかし、教育活動においては「誤解」を「理解」としてはならない。「たしかな児童生徒理解」はすべての教育活動における基盤であり、それがなければ教育そのものが成立しないことになる。

今回は、教師が教育現場で児童生徒を誤解せずにその本質を「見る」ための、現象学的本質直観を用いた児童生徒理解の方法について紹介し、教師自身の他者理解について再考する機会としたい。また、児童生徒や保護者と向き合った際に場の雰囲気や気配を感じ取る教師の身体能力という面から、教育現場に必要なコミュニケーション能力について検討し、参加者の皆さんの今後の教育実践につなげたい。

パネリスト 渡辺 弥生 氏 プロフィール

法政大学文学部心理学科教授、同大学大学院ライフスキル教育研究所所長。教育学博士。筑波大学大学院博士課程で心理学を学び、筑波大学、静岡大学を経て現職。ハーバード大学教育学研究科在外研究員、カリフォルニア大学サンタバーバラ校客員研究員も務めた。専門は発達心理学。社会性・感情・道徳性の発達を中心に、感情リテラシー、ソーシャル・エモーショナル・ラーニング（SEL）、対人関係問題を予防する心理教育プログラムの開発と実践に取り組む。研究成果を学校教育や家庭、社会へ還元する活動にも力を注ぐ。

主な著書に『感情の正体』（ちくま新書）『怒っている子どもはほんとうは悲しい』『子どもの「10歳の壁」とは何か？—乗り越えるための発達心理学』（光文社新書）等がある。メディアではNHK「クローズアップ現代」、Eテレ「こころ忍術 ポポまるっ! 忍者ドラマ×感情マネジメントこころとのつきあい方がわかる!」等にも出演と監修にも携わる。

人生の幸せの一つは、自分の経験を語り、それを一緒に笑い、時には共に悲しんでくれる関係をもてることにあると思います。

自分に他者があるように、他者にも自分があり、お互いを大切に思い合う「構ってほしい（mattering）」という気持ちを満たし合えたとき、人は信頼や居場所感を得て、「生きていてよかった」と思えるのではないのでしょうか。こうした教育のあり方を考えるとき、ソーシャル・エモーショナル・ラーニング（SEL）の視点はとても役立ちます。自己と他者への理解を深めて関係性を築き、自分の気持ちを上手にマネジメントしながら自立して物事を決められるようになったとき、私たちは互いに成熟した人間として、共に生きていけるのだと考えます。